

萌芽的研究論文

## 雑誌『クロワッサン』が描いた 〈女性の自立〉と読者の意識

池松玲子

女性の権利や解放をめぐる国内外の動きと連動するかのようには、1970年から80年にかけては新しいタイプの女性雑誌が続々と創刊された。なかでも雑誌『クロワッサン』は「女性の自立や解放を代弁し、女性の新しいライフスタイルを提唱した」雑誌と位置づけられている。だが同誌が発信した〈女性の自立〉の内容についての具体的研究はなされていない。そこで1970年代末から80年にかけて雑誌『クロワッサン』に掲載された女性の生き方関連記事と読者の投書の内容分析をもとに、同誌が示した〈女性の自立〉の内容と、それが当時の読者にどう捉えられたかについて検討した。その結果、『クロワッサン』は、経済力をもち結婚に依存しない個としての「女性の自立」と、主婦アイデンティティを堅持しつつ多様な活動にとりくむ、主婦としての「女性の自立」という2タイプの「女性の自立」を提示し、読者に支持されたのは主に後者だったと結論づけた。性別役割を受け入れ家事と家族のケアを担っていた当時の読者女性達には、同誌が提示した個としての「女性の自立」は非現実的なものに映り、自らの自立のために家族のケアを手放すことはできなかった。こうした女性たちには主婦アイデンティティを堅持した「女性の自立」が目指すべき方向として受容されたと考えられる。

キーワード：主婦，ライフスタイル，女性の自立，雑誌分析

## 1. はじめに

「国連婦人の10年」(1976～85年)や女性差別撤廃条約批准(国連採択1979年)にむけての取り組み, また第二波フェミニズムの端緒と位置づけられるウーマン・リブの始まり(1970年)など, 1970年から80年にかけての, 女性たちによる国内外のこうした動きは, 女性に対する社会の意識や制度変革を促した。

同時期には雑誌やテレビなどのマスメディアで女性の自立を取り上げる言説が急増し, 職業を持つ, 社会参加をする, 自分自身の生きる目的を持つことが奨励された。それらの言説において女性の自立は「主として夫や子どもへの依存からの脱却と経済力を身につけること」と捉えられていた。(袖井1992: 2)

1970年代初頭には従来の婦人雑誌とは全く異なる新しい女性雑誌『an・an<sup>(1)</sup>』や『non・no<sup>(2)</sup>』などが創刊され, 70年代後半には『an・an』や『non・no』を読んで大人になった女性たち向けに『MORE<sup>(3)</sup>』や『クロワッサン<sup>(4)</sup>』が続いた。『MORE』や『クロワッサン』は女性たちの自立や解放を唱えて女性の新しいライフスタイルを提示した雑誌と位置付けられている。しかし, これらの女性雑誌が提示した新しい女性のライフスタイルや女性の自立が実際にはどのような内容だったのか, そうした女性雑誌の記事に接した読者女性たちは自らの自立や解放をどのように捉えたのかということまでは明らかにされていない。

本研究は, こうした女性雑誌の中でも創刊1年後に「ふたりで読むニューファミリーの生活誌」というコンセプトから「女の新聞」として方向転換した『クロワッサン』に着目し, 同誌が描いた〈女性の自立〉と読者の受け止めかたとの関係を, 記事と読者投書の分析から実証的に明らかにするものである。

なお自立は多義的な用語であり, 女性の自立の定義や解釈も複雑であることから, 本稿では女性の自立を当時の社会で常識化していたと思われる「(女性が)夫や子どもへの依存から脱却し経済力を身につけること」と暫定的に定義し(以下「女性の自立」と記す), 『クロワッサン』誌が描いた女性の自立の内容(〈女性の自立〉と記す)を明らかにしていく。

## 2. 先行研究の検討

『クロワッサン』は1977年に創刊され月2回刊行の女性向け雑誌である<sup>(5)</sup>。1980年前後には, 発行部数は54万部, 読者は女性が95%であり, うち81%が20歳から34歳とされる。ニューファミリー誌から新しい女性の生き方に編集のウェイトを置き換えて部数を伸ばした雑誌で, ファッション・インテリアから出産・育児にいたるまでの広範囲に及ぶ最新情報を掲載した。(メディア・リサーチ・

センター 1981: 149)

同時期の女性雑誌をとりあげた研究としては、井上輝子らによる『女性雑誌を解読する—— COMPAREPOLITAN 日・米・メキシコ比較研究』があり、『クロワッサン』は1970年以降の日本の新興女性雑誌の中でも「70年代において表面化した女性の自立<sup>(6)</sup>と解放への欲求を代弁する雑誌として、伝統的女性像のステレオタイプを破って、新しいライフスタイルを模索ないし推奨する方向を示した」雑誌のひとつに位置づけられている(井上 1989: 38)。ウーマン・リブが70年代後半に勢いを弱めた後、『クロワッサン』などの新興女性雑誌がリブの提唱した新しい女性の生き方の可能性を示唆して、読者たちを後押ししたという<sup>(7)</sup>(井上 2008: 211)。また『MORE』や『クロワッサン』は、『an・an』や『non・no』の講読を通じて「『女の子』の自由を経験し大人になった女性たちが、『女の子』を卒業して従来のご家庭の主婦に『おさまる』のではなく、新たな自由を求めて作り出した次なる自由への言説の場だった」との指摘もある(坂本 2000: 118)。

ただし、『クロワッサン』が、具体的にはどのような女性の生き方や自由を描いていたか、また「女性の自立と解放への欲求を代弁する雑誌」(井上 1989: 38)としてどのような「女性の自立」像を示し、それらが読者にどう受け止められたのかについての詳細は明らかにされていない。そこで、本研究ではこの点を明らかにしていく。

### 3. 対象記事の収集と分類

本研究では『クロワッサン』が「女の新聞」として再出発した1978年5月号(No.13)から80年12月号(No.75)までの約3年間に発行された63冊の中から生き方をめぐる記事及び読者の投書を抽出し分析対象とした。記事収集の手順を以下に述べる。

まず、生き方に関連する記事のうち、女性の就労、家族<sup>(8)</sup>、女性論、結婚・離婚、社会的活動、セクシュアリティをテーマにした記事を分析対象とすることとした。各テーマの記事選択のためのキーワードを決定し、各キーワードを含むタイトルの記事を目次から選び<sup>(9)</sup>、記事内容を確認し、ファッション、インテリア、料理、生活情報中心の記事、また外国紙からの転載記事等を除外した<sup>(10)</sup>。さらにこれらの記事を、1. 女性の就労、2. 主婦、3. 女性論、4. 結婚・離婚、5. 読者投書に類別した。

読者の受け止め方を把握するために、投書に関しては①投書欄への投書、②読者アンケート結果報告、③読者の投書を元にした特集記事を分析対象とした。

最終的な分析対象記事は計179件となった。分類後の記事件数と分類のための

キーワードは表1、分析対象記事タイトル一覧は表2に示す。1から4までの記事内容の要旨を作成し、さらに記事に登場した女性たちのテーマに関する特徴的な文章を抽出しまとめた。5. 読者投書では、生き方をめぐる内容のもののみを取り上げ、主張がよく読みとれる文章を抽出して表にまとめた上で、各号ごとの投書の主張を内容別に再分類した。分類後のカテゴリーは1. 焦燥感・閉塞感, 2. 「翔んでる女」批判, 3. 自立志向, 4. 専業主婦・結婚肯定の4つである。分析対象の投書タイトル一覧を表3<sup>(11)</sup>に示す。

表1 雑誌『クロワッサン』テーマ別「生き方」関連記事とキーワード一覧

テーマ	1. 女性の就労	2. 主婦		3. 女性論			4. 結婚・離婚	5. 読者投書
		家族	脱専業主婦入門	女性論	社会的活動	セクシュアリティ		
件数	21件	14件	43件	15件	8件	4件	21件	53件
分類 キーワード	仕事、職業、働く、雇用、業界、月給、職場、就職	家族、家庭、子ども、夫、主婦、亭主、ミセス、父、母	全掲載記事	女性論、生き方、生活、自由、母性、婦人(女性)問題	フェミニズム、運動、活動、グループ、大学、コミュニティ	性、セックス、ポルノ、レイプ	結婚、離婚、婚約、初婚、未婚、シングル	①投書欄の投書 ②読者アンケート結果報告 ③読者の投書を元にした特集記事

(記事合計 179件)

表2 雑誌『クロワッサン』分析対象記事タイトル一覧

1. 女性の就労 (21件)	2. 主婦 (57件)		3. 女性論 (27件)	4. 結婚・離婚 (21件)	5. 読者投書 (53件)	
		脱専業主婦入門			投書欄	アンケート結果・特集記事
女の自由業の自由度 (NO14)	「子どもからの自立」をめ ぐって (NO18)	店を持つ (NO13)	女性のための ポルノ夏季集 中講座 (NO17)	離婚の増加は 女にとって良 いことだ (NO13)	読者の手 紙から (NO23)	読者アンケートから… いまいちばんしたいこ と (NO29)
仕事に魅せら れた3人の女 性たち (NO18)	家族熱 (NO18)	外国語を 学ぶ (NO14)	自ら選んだひ とり暮らしの 自由度 (NO20)	結婚しない女 (NO18)	読者の手 紙から (NO24)	「結婚」からの解放： 本誌25号読者アンケ ートから (NO32)

男の中で働く 女たち (NO32)	「女に育児は 任せられない」男と女の 物語 (NO32)	近代7種 (NO15)	新しい生活が 私を変えた (NO23)	離婚の流行学 (NO24)	読者の手 紙から (NO26)	読者の手紙からワイド 版…女性論・結婚・離 婚・家計簿 (NO34)
働く女の働く 条件を考える (NO31)	なぜ辛口のホ ームドラマが 流行するの か？新しい家 庭像を求めて (NO38)	ボランティア (NO16)	今フェミニス ト運動は？ (NO28)	離婚で転身 (NO31)	読者の手 紙から (NO30)	読者の手紙からワイド 版…翔びたい心と翔べ ない現実 (NO40)
仕事の無い人 生は考えられ ません (NO32)	亭主離れの時 代 (NO46)	大学の聴 講生になる 方法 (NO18)	女にとってい ま何が問題な のか：79年 版女性論カタ ログ (NO29)	未婚の母を決 意するまで (NO32)	読者の手 紙から (NO31)	読者アンケートから… 女の顔ベスト30 (NO40)
仕事を持って いる女にとっ ていい亭主と は (NO32)	過保護の果て に：母子相姦 の実態 (NO48)	雑誌を作る (NO19)	グループ：女 性が社会的に 活動するため に (NO29)	離婚して男に 絶望した女の 言い分・男の 言い分 (NO35)	読者の手 紙から (NO32)	読者の手紙から…女は 年齢を無視できるか (NO43)
女が働きやす い職場の条件 (NO37)	白石奈緒美の プロフェッシ ョナル・ミセ ス宣言：家事 はレジャーで ある (NO51)	織物を織る (NO22)	立教大学の 新入生たち（社 会人）(NO31)	離婚志願 (NO41)	読者の手 紙から (NO38)	読者の手紙から…“夫” の呼び方についての疑 問をめぐって (NO44)
給料に男女差 はあるのか？ (NO37)	主婦は発言す る (NO59)	投書 (NO23)	桐島洋子入 門：「結婚」 という形式を 超えて自由に 生きるスーパ ー・スター (NO32)	離婚をすると 女は美しくな る？ (NO41)	読者の手 紙から (NO45)	女が目で見直 すと…36号読者アンケ ートから (NO44)
女の月給袋 (NO37)	専業主婦宣言 で山口百恵の イメージはど う変わったか (NO61)	アニメー ション彩色 (NO24)	新しい女性論 の時代 (NO36)	離婚後の経済 的自立 (NO41)	読者の手 紙から (NO46)	第39号読者アンケ ートから…今いちばんし たいこと (NO46)
男を使う女達 (NO43)	主婦が創るミ ニコミ誌が今 いちばん面白 い (NO61)	手すき和 紙 (NO25)	女と自由と愛 について私は こう考える (NO37)	離婚ドキュメ ント (NO41)	読者の手 紙から (NO48)	離婚志願への反論 (NO46)
アメリカで働 く女性たち (NO48)	女が働きに出 るとき、子ど もはどうする か？ (NO63)	声優 (NO26)	桐島洋子：私 の生き方 (NO48)	離婚に魅力を 感じたら、そ の前に読んで ください (NO41)	読者の手 紙から (NO49)	読者の手紙から…結婚 と離婚をもう一度考え る (NO47)
続・アメリカ で働く女性た ち (NO56)	ベビーホテル は安全か？ (NO65)	パワーリ フティング (NO28)	「わが愛と性 の履歴書」か ら (NO48)	離婚志願の女 性へ、男の意 見 (NO41)	読者の手 紙から (NO54)	私の小さな店…読者ア ンケートから (NO49)
職場の女性差 別 (NO57)	「子供」をつ くらない生き 方 (NO66)	手描き友 禅 (NO29)	選ばれた女た ちの女性論 (NO52)	婚前結婚のす すめ (NO45)	読者の手 紙から (NO55)	私の結婚観・私の結婚 体験…読者アンケート から (NO50)

カタカナ職業は本当にカッコイイか？(NO58)	主婦の小遣い(NO75)	手作り絵本(NO30)	本当の女の人生は40歳から始まる(NO54)	婚約解消(NO50)	読者からの手紙(NO57)	読者の手紙からワイド版…婚前結婚への反論・主婦の反抗期ほか(NO50)
女の就職・転職・再就職(NO60)		登山エベレスト征服の田部井淳子さん(NO31)以下NO32～59まで28件	ウーマン・パワー：女のグループ(NO54)	私にとって結婚とは(NO50)	読者の手紙から(NO58)	読者の手紙から…「女の新聞」クロワッサンを批判する(NO52)
なぜ男女雇用平等法ができないのか(NO60)			女のグループ告知板(NO54)	子どもの目から見た親の離婚(NO51)	読者からの手紙(NO59)	本誌48号読者アンケートより…今年こそぜひやってみよう(NO53)
男性中心の職場では女性は本当に男のように考えレディのようにふるまい犬のごとく働かなければならないのか？(NO61)			女のグループ女同士のコミュニケーションのために(NO54)	40歳の初婚(NO54)	読者の手紙から(NO60)	読者の手紙から…女にとって子どもとは(NO53)
男性中心の職場の中で女にとっていま何が問題なのか(NO63)			レイプ裁判でなぜ女は不利なのか？(NO56)	「ある結婚の風景」イングマル・ベルイマンの映画から(NO55)	読者の手紙から(NO61)	読者アンケートから…嫌いな言葉No.1は「翔んでる女」(NO57)
女の新しい仕事(NO64)			市川房枝：わたしの生きかた(NO60)	「結婚幻想」は消えたのか？(NO57)	読者の手紙から(NO62)	読者アンケートから…あなたは自分の一生のイメージをもっていますか？(NO62)
全女性議員に聞いた、あなたは「男女雇用平等法」に賛成ですか？(NO68)			澤地久枝：わたしの生きかた(NO62)	脱結婚時代シングルズとは？(NO67)	読者の手紙から(NO63)	読者アンケートから…焦燥感(NO63)
旅行業界の「女性同盟」(NO68)			立教大学：主婦学生・先輩後輩座談会(NO62)以下NO62, NO67, 69, 70, 71, 72。	シングル・ウーマンたちはいま…不満(NO67)	読者の手紙から(NO64, 以下NO65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75)	読者アンケートから：いま、いちばん関心あること(NO64)

表3 雑誌『クロワッサン』分析対象読者投書タイトル一覧

1. 焦燥感・閉塞感 (70件)	2. “翔んでる女” 批判 (40件)	3. 自立志向 (102件)	4. 専業主婦・結婚肯定 (72件)
私は専業主婦で、いささか毎日いらだち気味。(NO23)	ワイド版読者の手紙から：結婚しない女だのキャリアウーマンだの…。(NO34)	「女だけの新聞」になるな。(NO24)	「ハッ」と驚いた脱専業主婦入門。(NO26)
主婦性痴呆症からの脱出。(NO24)	ワイド版読者の手紙から：“キャリアウーマン” “翔んでる女” をこれでもかこれでもかと…。他2件。(NO40)	「結婚しない男」について。(NO26)	読者アンケート「結婚」からの解放：結婚って女の社会的義務…。その他24件。(NO32)
読者アンケート今一番したいこと：せめて3日でもいいから私のための時間が欲しい。他5件。(NO29)	読者アンケート女の中で世の中を見渡すと：翔んでる女、キャリアウーマン、女の自立…。他1件。(NO44)	読者アンケート今一番したいこと：勉強したい…。その他9件。(NO29)	ワイド版読者の手紙から：家内で仕事をしている専業主婦などの…。(NO34)
読者アンケート「結婚」からの解放：私の住んでいる町では…。その他6件。(NO32)	読者の手紙から離婚志願への反論：離婚すると女は美しくなる、離婚後の経済的自立、慰謝料について…。他2件。(NO46)	“専業主婦” にショックを。(NO30)	ワイド版読者の手紙から：主婦をいけなもののように…。他2件。(NO40)
独身も楽じゃない。(NO32)	女が1人働いて食べて行くことは考えるほどかっこよくなく、翔んでるどころか生活のため。(NO48)	クロワッサンは私には害になる雑誌。(NO31)	32歳。大事な彼の元には嫁ぐ準備をしています。(NO43)
ワイド版読者の手紙から：私は自由に飛び回っている夫のもとで暮らす日陰者…。(NO34)	女性をテーマに考えるとき、宗教とかかわりも忘れてはならない。(NO49)	読者アンケート「結婚」からの解放：結婚したからといって…。他30件。(NO32)	専業主婦の方、自分の生き方に自信を持って！(NO45)
①28歳で独身は不思議な状態か？。②クロワッサンの「女の書齋」を見て4畳半を占領。(NO38)	読者アンケート私の結婚私の結婚体験：キャリアウーマンだとかトンでる女だとか…。他2件。(NO50)	10年後の自分に期待を。(NO32)	読者アンケート今いちばんしたいこと：子どもを人に預けてまで…。他1件。(NO46)
ワイド版読者の手紙から：病的に嫉妬深かった夫…。(NO40)	ワイド版読者の手紙：翔んでる女性の生き方が書かれています。他2件。(NO50)	ワイド版読者の手紙から：クロワッサンを手にしてから…。他3件。(NO34)	読者の手紙から離婚志願への反論：女をあんなにバカにしていますよね。他3件。(NO46)
①女性たちの体験談に励まされた。②年齢差別が主婦を家庭に押しこめる。③考えるほどにセクナークになってまいります。(NO43)	読者の手紙から「女の新聞」クロワッサンを批判する：クロワッサンの対象とする女性は誰ですか。他5件。(NO52)	読者アンケート女の顔ベスト30：信念をもって生きてきた人は…。他6件。(NO40)	速く離れて彼の存在を確かめました、この10月に結婚します。(NO47)
読者アンケート女の中で世の中を見渡すと：ざっと数えて11年、全国各地を旅したと思えばそれまでだけ。他4件。(NO44)	①脱専業主婦の子育て問題。②私生活はもっと大切に扱われるべき。(NO54)	①ああ忙しい。それが主婦兼OLの充実感なのかも。②手に職も無く、どのように子持ちの女性は頑張ったらいいのか。(NO43)	読者アンケート私の結婚私の結婚体験：結婚って女を強くするし…。他6件。(NO50)

婚約を解消したい。(NO45)	読者アンケート嫌いな言葉 No.1 は「翔んでる女」: 無理に翔ばなきゃいけないような…。他 8 件。(NO57)	読者の手紙から「夫」の呼び方についての疑問をめぐって: なぜすんなり主人と言えないのか。他 2 件。(NO44)	読者の手紙から「女の新聞」クロワッサンを批判する: 私はごく普通の女性のための…。他 1 件。(NO52)
読者アンケート今いちばんしたいこと: 一人旅したいのは…。(NO46)	私の脱専業主婦。(NO57)	ヘビの生殺しという生活はもうイヤ。(NO45)	出産後も生活は変えまいと思ってきたのに (NO53)
結婚して一ヶ月。非常に疲れを感じています。でも頑張ります。(NO47)	姑に子どもをまかせてよいか。(NO59)	読者アンケート今いちばんしたいこと: やりたいことは誰にだってある…。(NO46)	読者アンケート今年こそぜひやってみたい: 会社をやめて専業主婦になりたい。(NO53)
男性はあの歌詞が理想で、そういう女の人が好きなんですよね。(NO48)	女同士、手をつなぎたいのに…。(NO61)	クロワッサン・セミナーに出席して。(NO46)	読者の手紙から女にとって子どもとは: 私の理想は 2 人して子どもを育てようだったのですが…。(NO53)
年齢にふさわしい人間になりたいと思います。(NO49)	家庭科を男の子にも。(NO66)	離婚を決意しています。しかし、苦しみぬいていきます。(NO47)	彼は何か仕事をしなさいというけれど、私は主婦だけに徹したいのです。(NO54)
読者の手紙ワイド版: 婚前結婚したとたん口をきいてくれなくなる。その他 1 件。(NO50)	①子どもをつくらないあなたに…。②常識のごとくあたりまえに子どもを生んで。(NO68)	あの歌が女たちの間で、非常にウケているという事実が示す、女たちの認識の甘さです。(NO48)	当たり前のことをいかにも大変そうな問題としてとりあげるのは…。(NO55)
読者の手紙から「女の新聞」クロワッサンを批判する: クロワッサンを読むと… (NO52)		「婚約を解消したい」を読んでひと言。(NO49)	読者アンケート嫌いな言葉 No.1 は「翔んでる女」: 自分で稼ぎ自分で食って社会に気負って…。(NO57)
読者アンケート今年こそぜひやってみたい: 私は電車、バスなどを一人で利用したことがあります。他 2 件。(NO53)		読者アンケート私の結婚私の結婚体験: 生活していくだけの収入があれば…。他 3 件。(NO50)	①ミズかミセスか?。②子育て問題と私の退職。(NO58)
働く女性と専業主婦との溝。主婦が外へ出る本音とは。(NO55)		読者の手紙から「女の新聞」クロワッサンを批判する: あまりにも“女”を固執しすぎていませんか。他 7 件。(NO52)	「結婚幻想は消えたか」に反論。(NO60)
主婦の焦りについて。(NO58)		読者アンケート今年こそぜひやってみたい: 必ず就職するつもり。他 2 件。(NO53)	私は主婦になりました。この幸福を大事にしたい。(NO61)
①わたしは怠け者でしょうか。②ある決意。(NO59)		手作りの人生を。(NO57)	読者アンケートあなたは自分の一生のイメージをもっていますか: 20 代は子ども中心で過ぎた。他 1 件。(NO62)
ご主人さま、たまには優しくしてください。(NO62)		姉のこと…。(NO59)	結婚相手の条件は農家の長男であること。(NO62)



読者アンケートより焦燥感：何かをしなければ。生きがいをもてる何かを…。他 22 件。(NO63)		読者アンケートあなたは自分の一生のイメージをもっていますか：ひとりで生きていく条件がなかったら、ひとりだろうとふたりだろうと行きたい。他 3 件。(NO62)	澤地さんの講演を聞いていろいろのことを考えました。(NO63)
私はいったいナニなのか。(NO65)		皆さんもっと子宮を大切にしましょう。(NO62)	読者アンケート今いちばん関心あること：同世代新婚家庭における生活費の内訳。他 1 件。(NO64)
私も主婦という言葉が嫌い。(NO67)		読者アンケート今いちばん関心あること：女性の意志のもとに行える避妊方法について。(NO64)	男と女の違いとは？。(NO64)
男だって家事のひとつやふたつは…。(NO75)		61号「私は主婦になりました」を読んで。(NO65)	「専業主婦宣言」に賛成！。(NO66)
		社会が遅れているのか、社会福祉が遅れているのか。(NO66)	保母の立場から。(NO68)
		①人生の曲がり角で桐島さんの話を聞いて。②なぜ女の心の一人旅をヘンな目でみるの。(NO67)	最近思うこと。(NO69)
		専業主婦宣言のあなたへ。(NO69)	子どもを生まないのは自由だけだ。(NO70)
		結婚イコール母親ではないが。(NO70)	8/10号“家庭科を男子にも”の意見について。(NO71)
		ダメな女のひとりごと。(NO71)	「児童手当」って変ですね。(NO74)
		女性せり人第一号に拍手。(NO72)	おけいごとを始めてみて。(NO75)
		日本の女はその日をどうすごしたきたか。(NO73)	
		善男偽悪女の交際法は。(NO74)	
		女たちよ、見えない物をきりなさい。(NO75)	

## 4. 分析結果

### 4-1. 『クロワッサン』が示した〈女性の自立〉

『クロワッサン』の生き方をめぐる記事から、まず女性の就労関連の記事、続いて主婦関連記事进行分析し、最後に女性論、結婚・離婚関連記事を併せて分析する。

#### 4-1-1. 働く女性への賞賛

女性の就労関連記事は21件であり、その内、既婚・未婚とりまぜて働く女性を肯定的に捉える記事が12件、女性が働くことに関する情報提供記事が9件であった。

働く女性を肯定的に捉える記事にみられる働く女性モデルには①男性中心組織で働くエリート女性、②自らの能力で道を切り開いた自営業の女性、③新しい職業や「カタカナ職業<sup>(12)</sup>」の女性、④米国で働く女性などがあつた。これらのモデルは生き生きと働く女性たちであり同誌はこうした働く女性を賞賛し印象付けているが、いずれのモデルも当時の働く女性の中では例外的存在であり身近ではない。漠然としたイメージではなく具体的なモデルを示すことで読者を鼓舞したものと読み取れる。さらに同誌は有名無名の実際に働いている女性の職業観をとりあげ示すことで、主婦が働くことは特別なことではないと示唆し、家事・育児専業の主婦に疑問をなげかける。

他方、情報提供タイプの記事では、「女が働きやすい職場の条件」（1979年 No.37）、「女の新しい仕事」（1980年 No.64）、「男女雇用平等法」関連記事（1980年 No.60, No.68）などを取り上げて女性の就労を後押しし、「職場の女性差別」（1980年 No.57）といった問題にも触れている。さらに女性の生活歴が仕事に直結するような領域の職業や、女性性を前面にだす働き方なども示している。

「女だからこういう見方ができる、それが生きてくると思うんです。結婚して仕事が続けられるかと考えた場合も、子供がいるから、それなりの見方ができ、番組ができる。常に、女であることをプラスの方向へ活かせると思っているんです（22歳、アナウンサー）」（1978年 No.23: 35）。

女性性が期待される職域での女性の優位性への言及からは、既婚女性が働くことは困難ばかりではないという同誌の主張が読み取れる。他のカテゴリーの記事とは異なり、特に「女性の就労」関連記事では働く女性を賞賛し、職業をもたない主婦に働くことを促す傾向がみられる。

#### 4-1-2. プロフェッショナル・ミセス／脱専業主婦

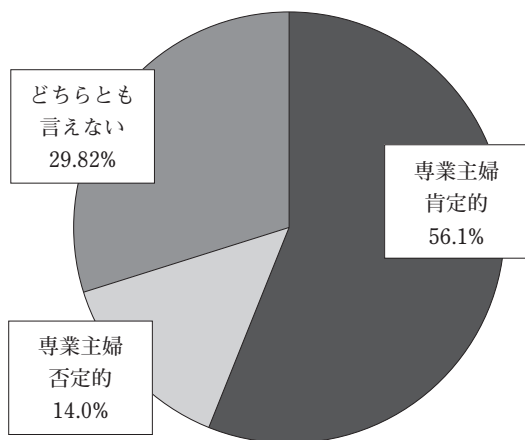
働く女性を称賛し、家事・育児に専念する主婦に就労を促す一方で、主婦関連記事では専業主婦を肯定的に取り上げている。

主婦関連記事57件を、専業主婦に肯定的か、否定的かという側面で点数化した<sup>(13)</sup>。その結果は、専業主婦に①肯定的32点、②否定的8点、③「どちらともいえない<sup>(14)</sup>」17点で、専業主婦を否定的に扱った記事が少ないと分かる（図1）。

主婦関連記事には、専業主婦ならば料理、室内装飾、接客術などの家事に専門家レベルの高い能力を発揮するプロフェッショナル・ミセス、ないしは主婦アイデンティティを重視しつつ働いたり趣味や社会活動を実践する脱専業主婦が肯定的に描かれている。

連載記事「脱専業主婦入門」は分析対象期間にはほぼ毎号連載されており、経済活動、社会活動、趣味活動、あるいはこれらを組み合わせた活動を実践する主婦とその活動内容を紹介している。活動内容としては経済活動が最多で、個人やグループでの店舗経営や趣味が収入につながった事例、あるいは収入には結びつかないもののハイレベルな趣味や学習といった事例がとりあげられている。しかし回を追うごとにこの連載は単に働く女性の事例と大差のない内容になっていく。働く女性との相違点は主婦アイデンティティの強調で、「必要なことはちゃんとやってるつもりです。2人の子供に食事を作り、1日1回の掃除、洗濯。寝てる以外はフルに動いてるって感じがします(既婚、子持ち、デコパージュ講師)」(1979年 No.50: 61)などと当事者から「家事もやっている」、「家族を第一にしている」といった発言を引き出している。フルタイム就労者であっても、あくまでも脱専業主婦であり脱主婦ではない。女性の就労関連記事で示した働く女性像とは対照的な女性像、すなわち主婦アイデンティティを堅持しつつ、主婦役割以外の活動も実践する脱専業主婦という女性像がバラエティも豊富に提示されているのが特徴といえる。

図1 「主婦関連記事」(57件)



#### 4-1-3. 結婚への疑義・選択肢としての離婚

次に、女性論関連記事と結婚・離婚関連記事を併せて分析していく。まず女性論関連記事27件を、a 家族中心の生き方と、b 個人中心の生き方のどちらに肯定的かという視点と、A 結婚に肯定的か、B 結婚に否定的かという視点から前項と同様に点数化した。その結果は①家族中心の生き方肯定4点、②個人中心の生き方肯定19点、「どちらでもない<sup>(15)</sup>」4点、③結婚肯定10点、④結婚否定7点、「どちらでもない」10点だった(図2-1、図2-2)。女性論関連記事には、結婚について肯定的、否定的かに大差はないものの、家族中心よりも個人中心の生き方を肯定する傾向がみられる。

続いて女性論関連記事と同様の手順で、結婚・離婚関連記事21件を結婚に①肯定的か、②否定的かという視点と、離婚に③肯定的か、④否定的かという視点で点数化した。結果は、①結婚肯定4点、②結婚否定9点、「どちらでもない」8点、③離婚肯定10点、④離婚否定1点、「どちらでもない」10点だった(図3-1、図3-2)。結婚・離婚関連記事では結婚を否定的に、離婚を肯定的にみる傾向がわかる。

離婚をテーマとした記事には「離婚の増加は女にとって良いことだ」(1978年N0.13)、「離婚で転身」(1979年No.31)、「離婚志願」(1979年No.41)、「離婚をすると女は美しくなる？」(同)、などの挑発的なタイトルが目立ち、離婚は女性のライフコース上の逸脱行為ではなく、離婚を恐れる必要はないという主張がくり返し現れる。また、離婚後の経済力の重要性を重ねて説いてはいるが、経済的に困難な状況を乗り越えているケースを紹介して、離婚が実際的な選択肢である

図2-1 「女性論」関連記事27件(家族/個人)

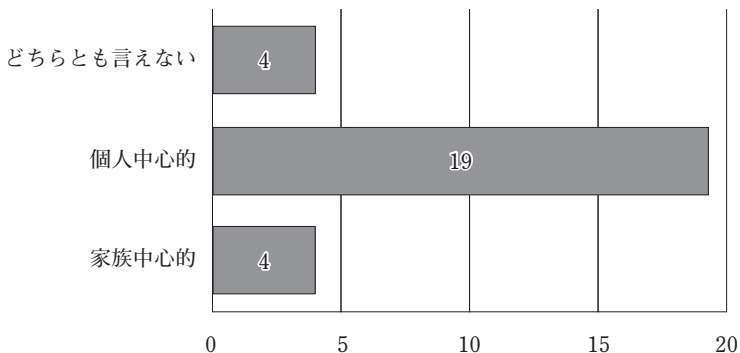


図 2-2 「女性論」 関連記事 27 件 (結婚肯定/否定)

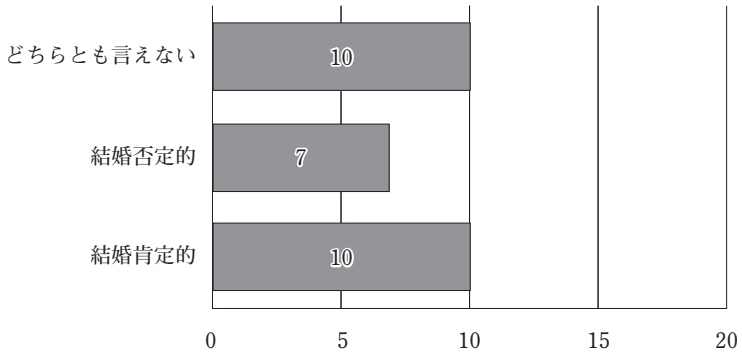


図 3-1 「結婚・離婚」 関連記事 21 件 (結婚肯定・否定)

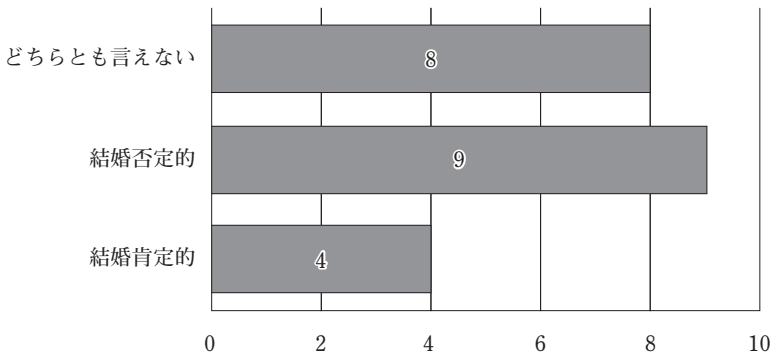
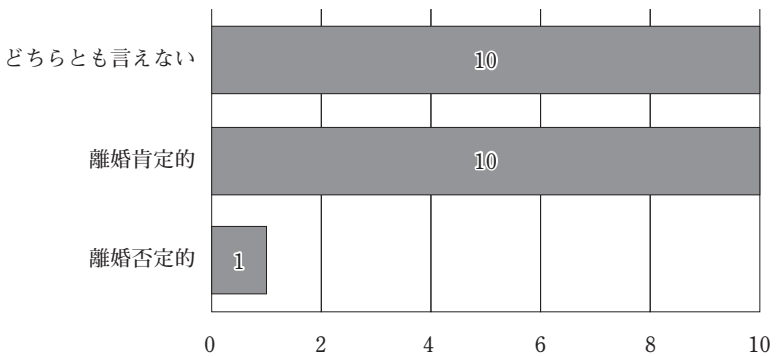


図 3-2 「結婚・離婚」 関連記事 21 件 (離婚肯定/否定)



ことも示している。こうした記事内容は、経済的な面から離婚は困難だとする従来の離婚観の変革を目指しているように読み取れる。

さらに『クロワッサン』の結婚観／離婚観を体現する存在として、作家であり自由に生きる自立した女性という位置づけで、法律婚をせずに子どもをもち社会的に活躍する桐島洋子<sup>(16)</sup>が登場する。女性論セミナーというイベントが分析対象期間に5回開催されており、桐島は第1回の講師として登壇している。講演内容は「桐島洋子：私の生き方」(1979年 No.48)という報告記事になっており、さらに特集記事「桐島洋子入門：『結婚』という形式を超えて自由に生きるスーパー・スター」(1979年 No.32)がある。桐島は、婚姻届を提出しない、あるいはパートナーの男性に依存しないという生き方を貫いて、明確に伝統的な結婚観を否定しており、彼女を繰り返し取り上げることで、結婚を懐疑的にみる同誌の価値観を体現させている。

このように女性論、結婚・離婚関連記事からは、家族よりも個人中心の生き方を重視し、結婚に依拠した女性の生き方に疑問を投げかけ、離婚も選択肢の一つであるとする同誌のメッセージを読むことができる。

#### 4-1-4. 小括一『クロワッサン』が描いた2つの自立する女性像

女性の就労、女性論、結婚・離婚関連記事の分析からは、『クロワッサン』は結婚への疑義を呈し離婚が選択肢のひとつであることを示すと同時に、家族中心ではなく個人としての生き方が重要であると主張していることがわかる。さらに働く女性を賞賛することで家庭にいる女性たちに就労を促してもいる。その一方で、主婦関連記事では専業主婦の生き方を否定することなく主婦アイデンティティを維持した働き方も提示している。

こうした記事によって同誌は、①経済力を持ち結婚に依存することなく離婚を恐れず自由に生きる解放された女性像と、②高い家事能力をもった専業主婦や家族中心でありながら多様な活動にとりくむ主婦という2タイプの女性像を理想化して描いたとみることができる。対比的で矛盾するはずの2の女性像は並列的に描かれている。つまりこの2タイプの女性像を通して同誌は自由で解放された個としての「女性の自立」と、主婦アイデンティティの堅持を中核に据えた「女性の自立」を提示したといえよう。

#### 4-2. 『クロワッサン』読者にとっての「女性の自立」

1980年前後の日本社会では専業主婦世帯が多数を占め、性別役割分業意識も強かった<sup>(17)</sup>。本節ではこのような時代背景の下で『クロワッサン』が描いた〈女性の自立〉を読者がどう読んでいたのかを、投書の分析を元に検討する。

#### 4-2-1. 焦燥感・閉塞感

焦燥感・閉塞感をめぐる内容は、それ自体をテーマにしたものから、投書の文中で言及されるケースまで広範にみられ、「焦燥感 読者アンケートより」(1980年 No.63)という特集記事にまでなっている。中でも以下の例のように主婦であることに起因する焦燥感・閉塞感が特徴的である。

「いわゆる専業主婦の生活を送っています。そしてクロワッサンを読むたびに自分がだんだんミジメになってしまいます。毎日家事と子供の世話で明け暮れ、好きなこともできず、これでは本当に気がついたらオバアサンになっていたなんていうことになりそうです(兵庫県尼崎市, 既婚, 子持ち)」(1980年 No.59: 90)。

1980年代初めには主婦のアルコール依存症や「台所症候群」といわれた精神疾患が話題になり、家庭に入り主婦となった女性たちの煩悶を描いた斎藤茂男著『妻たちの思秋期』がベストセラーになったのも1982年である(落合 2004: 157-159)。投書に現れた焦燥感・閉塞感もこうした主婦の問題と根を同じくするものと考えられる。

また多くの場合、焦燥感・閉塞感は『クロワッサン』に登場する有名無名の女性たちとの比較として言及されており<sup>(18)</sup>、女性が活躍する記事は読者を勇気づけるよりも、むしろ相対的剥奪感<sup>(19)</sup>を抱かせているようだ。これらの投書は特定の主張に対する反応ではなく、同誌の記事全般への受け取り方であり、相対的剥奪感が強いのは記事と読者の現実の乖離が大きいことの表れであろう。

#### 4-2-2. 「翔んでる女」批判

「翔んでる女」批判は、「翔んでる女<sup>(20)</sup>」, 「キャリア・ウーマン<sup>(21)</sup>」, 女性の自立といった言葉, あるいはそうした言葉で表される自由を求め伝統に束縛されることなく生きる女性像に対する反発であり, 焦燥感・閉塞感と同様に投書全体に広くみられるものである。こうした反発は『クロワッサン』が個人としての生き方を重視し働く女性を賞賛することで示した個として自立した女性像への批判と連動する。

内容にはマスコミが作り出したステレオタイプとしての「翔んでる女」や「キャリア・ウーマン」への批判もあるが, 読者自らの現状と比較した上での批判が多い。

繰り返しとりあげられる「翔んでる女」に辟易するという指摘があり, 「翔ぶ」すなわち, 個として自立し解放されたライフスタイルを実践することについての

疑問が以下の様に表明されている。

「無理に翔ばなきゃいけないような、そうしなきゃ流行におっつけられないような、何かしら自分が取り残されてるみたいに響きました。翔べない私のひがみですか？（大分県佐伯市，22歳，未婚）」（1980年 No.57: 35）。

さらに「翔んでる女」と対照的な位置にある主婦を選択するという主張も現れる。

「翔んでる主婦はジャンジャン私の目の前をとべばよいのです。でも私は私らしく主婦の顔をもつことにしました（神奈川県）」（1980年 No.54: 51）。

最後に、現実世界からかけ離れた特殊な女性たちに対して読者女性のあきらめが吐露される。

「社会で自立して生きていける女性はスーパーレディになり、特別なヒトになるわけです。そして多くの女性たちが彼女達を横目で見ながらお皿を洗うのです（大阪府豊中市，18歳，学生）」（1980年 No.66: 50）。

このような嫌悪感や反発は『クロワッサン』誌に向けたものというよりは、「キャリア・ウーマン」や「翔んでる女」という言葉で女性を揶揄するかのような、この時代のマスメディア全体への反発とも考えられる。『クロワッサン』編集部は「翔んでる女」を否定的な意味で一度用いただけで、「キャリア・ウーマン」は使っていないという（1980年 No.52: 45）。これらの言葉は主に記事に登場する人物と投書で発言する読者が使用し、それも批判的／否定的に用いられる傾向がある。こうしたことから「翔んでる女」と重なるような同誌が示した個として自立した女性像に共感を抱く読者は少なかったとみられる。

### 4-2-3. 自立志向

自立志向の投書には、『クロワッサン』の個として生きることを重視する価値観と主婦に働くことを促す傾向に同調する内容がみられる。こうした投書は焦燥感・閉塞感から抜け出し前に進もうとするものでもある。

投書は「私は絶対に職業は欲しいと思っていたの。独身だろうと、生活するためのお金は自分で働いて得ようと（神奈川県藤沢市，27歳，教師）」（1980年 No.62: 36）と同誌と同様に働くことを重視するものや、桐島洋子に代表される個



人を優先する「翔んでる女」を肯定的に受け取るものもある。

その一方で、以下のように自立を目指したいが家族より自らの望みを優先させることはできないと考える例もある。

「手は離れても背に目を注いでいなければならない幼い子どもたち、今私の焦りによって子どもたちの可能性も無にしたくない。そんな中でわずかな時間を自分の向上にと思っている（埼玉県、32歳、主婦）」（1980年 No.57: 56）。

また、結婚に関しては、同誌と同様に結婚を懐疑的にみる投書もなくはないが、「自立志向」の投書の多くは結婚を否定的に捉えてはいない。「読者アンケート記事『結婚』からの解放」（1979年 No.32: 27 - 33）という記事を例にみてみよう。

この記事は「“結婚について” というアンケートに未婚の読者から多数の反応があったため応募ハガキを分析し新しい“結婚”のイメージを探してみた」と説明されおり、記事内には63件の投書が紹介されている。分類は焦躁感・閉塞感7件、専業主婦・結婚肯定25件、自立志向31件であり、自立志向の投書に焦点をあて読みとくと明確に結婚を否定したものは5件とわずかだった。

自立志向の投書内容には、「一人で気ままに生活してきた自分にはたして他人と一緒に暮らすことができるのだろうか、自由な時間を持つことができるだろうか（横浜市、24歳、会社員）」（同：29）といった不安がみられるものの、多くは以下のように仕事や希望する活動と結婚を両立させたいと述べている。

「仕事も結婚も完全でありたい。自分に自信が持てたら結婚に飛び込むつもり（東京都、34歳、事務員）」（同：29）。

「一度は結婚してみたいと思います。（中略）私はやりたいことをやってから結婚したい時期に結婚する（青森県、21歳、文具販売）」（同：28）

自立志向であっても、その自立は結婚とともに捉えられており、投書内容と『結婚』からの解放」というテーマとは必ずしも噛み合っていない。このように、自立志向は『クロワッサン』の主張に共感を示し経済力を重視してはいるが、結婚を否定的に捉え、あるいは個人中心的な生き方を肯定するものではない。

#### 4-2-4. 専業主婦・結婚肯定

専業主婦・結婚肯定の投書には、結婚と専業主婦の価値を認め、焦躁感・閉塞感を主婦アイデンティティの強化や結婚／家族の価値を確認することで乗り切ろうとする傾向がある。これは結婚に疑問をなげかけ専業主婦に働くことを促す『ク

ロワッサン』への反論でもある。専業主婦を肯定する例としては以下のようなものがある。

「主婦としての仕事は確かにお金にはなりません、そうであっても『働く』という言葉には立派に値するものです。また主婦の立場にあっての幸福ができていかなどと決して思いません（大阪府高槻市、主婦）」（1980年 No.61: 52）。

専業主婦を肯定する投書に多くみられるのは、家事・育児は収入に結びつかない、あるいは専業主婦が社会的に貢献できる機会は少ない等の否定的な考えを打ち消す内容であり、働く女性への対抗的な意見である。一方で結婚を肯定する投書は以下のようなものである。

「もちろん彼を愛して結婚しました。私の結婚にとって、そのことが一番大切なことだと思っています。（中略）私が彼にしてあげられることは、ただ一つ、ぐちをこぼさず彼のしたいように、なんでも自由にさせてあげることだけです。これが私の彼に対する愛であり、一生の結婚観です（宮城県仙台市、30歳、既婚）」（1979年 No.50: 48）。

「手取り10万円前後で仕事に生きがいを見つけ、1人立ちし、結婚なんてしなくてもよいなんて、そんな世の中甘くありません。（中略）結婚は普通の形ですから、とりあげて問題にすることはしないような気もするし（広島県、24歳）」（1980年 No.60: 56）。

ここにはロマンチック・ラブ・イデオロギー<sup>(22)</sup>と結婚制度内部での女性の従属を疑うことなく受け入れる女性の価値観がみえる。同時に、こうした内容は当時の女性たちの自己弁護でもあり、結婚以外に選択肢の少なかった女性たちの現実的な考えでもあったろう。

また、専業主婦・結婚を肯定する女性たちには「自らの手で子育てをしたい/すべきだ」という意見もみられる。

「私の理想は二人して子供を育てよう、だったのですが、それは不可能だということがわかりました。どちらかが子供をみて、どちらかが生活費をかせぐのです。それが現状です（茨城県、21歳、既婚、子持ち）」（1980年 No.53: 46）。

「育児の責任からのがれて、自分の人生を追求したところで、幸福だろうかという疑問もわいたのです。とにかくせめて小学校まで私たちの手でしっかり育ててみようと思ったわけです（北海道函館市、27歳、主婦）」（1980年 No.58: 56）。

ここでは性別役割分業による子育て環境、育児は母親の責任という規範からくる強迫観念、母親による子育てを当然視するいわゆる「母性神話」に基づいた子育て観などを読み取ることができる。

以上のように専業主婦や伝統的結婚を肯定的に捉える考えは、個人中心的な生き方とは対照的な家族中心的な生き方を重視するものであり、結婚の従来のあり方を批判し女性たちの意識を問い直そうとする同誌への生活の場からの反論でもある。

#### 4-2-5. 小括一『クロワッサン』の示した女性像の是認と否認

読者の投書の分析結果から『クロワッサン』が描いた2つの「女性の自立」についての読者の受け止め方を検討する。概括すると、投書には自立志向と専業主婦・結婚肯定という対照的な主張があり、この2つに焦燥感・閉塞感と「翔んでる女」批判が共通して存在するという構図がある。専業主婦・結婚肯定と「翔んでる女」批判の投書では、主婦アイデンティティを維持した主婦として「女性の自立」が支持されており、その一方で、自立志向の投書では、個を重視した「女性の自立」が支持されている。しかし自立志向には、同誌の主張に共感を示し、経済的自立を重視する傾向はあるものの、結婚を否定し家族より個人を重視しているわけではない。

整理すると以下ようになる。読者の多くは自分の現状に焦燥感・閉塞感を抱いている。しかし、結婚し専業主婦となることを肯定する読者は「翔んでる女」に代表される新たな価値観をもつ女性像には共感するにいたらず、伝統的結婚観に依拠しつつも精神的に自立した主婦としての「女性の自立」をめざす。その一方で精神的自立だけでは満足しない読者は個としての「女性の自立」に共鳴し経済力をもつことには同調はするが、結婚しないライフスタイルまでは肯定しない。つまり読者女性たちが共感する自立した女性像は「翔んでる女」といったステレオタイプ化されたものではなく、より複雑でしかも生活に根づいたものだった。したがって『クロワッサン』が示した2つの「女性の自立」のうち、読者にとって現実的で受け入れやすかったのは主婦としての「女性の自立」だったといえよう<sup>(23)</sup>。

## 5. 結論

雑誌『クロワッサン』は2つの「女性の自立」像、つまり従来の結婚観にこだわらず経済力をもつ自立像（＝経済的自立）と、主婦アイデンティティを守る主婦としての自立像（＝「脱専業主婦」）を提示した。商業雑誌である『クロワッ

サン』は経済的自立を果たした女性像だけでなく、脱専業主婦という自立のあり方も提示することで読者層の現実寄り添ったといえよう。読者の投書を分析した結果、2つの女性像のうち多くの読者に支持されやすかったのが、伝統的な主婦とは異なる主婦像としての脱専業主婦だった。

女性の経済的自立は読者に受容されなかったわけではなく、当時の流行語「翔んでる女」でイメージされる女性像は共感を得にくく、それに代わる受入れ可能な「女性の自立」像を描ききれなかったのだともいえる。投書から読み取れる多様に複雑な読者の状況を考えても、より地に足がついた堅実な自立が求められていたのではないかと思われるが、今回の分析からは明らかにはできなかった。

性別役割分業を受け入れ家事と家族のケアを担っていた当時の読者女性たちの多くには、同誌が提示した経済的に自立した女性たちのイメージは非現実的なものに映った。経済力をもちたいと願いつつ自立のために家族のケアを手放すことができなかった読者は、自らの現実に対する不満を吐き出していた。しかし同誌の示した「経済的自立」モデルとの距離が大きく実現が難しかったため、主婦アイデンティティを維持したままの「脱専業主婦」という形の自立が一応の目指す方向として受容されたと考えられる。

読者女性の多くは経済的自立が困難な主婦という立場で自立を果たすという矛盾を抱えていた。性別分業システムを通じて高度経済成長を果たした「ゆたかな日本」のいわゆる「普通の主婦」だった読者の多くは、伝統的主婦との差異化を図る脱専業主婦というライフスタイルでの自己充足が現実的であったろう。『クロワッサン』が提示した矛盾する〈女性の自立〉像はこうした女性たちの夢と現実を反映したものであったのである。

(いけまつ れいこ 東京女子大学大学院)

#### 【注】

- (1) 『an・an』は1970年創刊の週刊誌で発行はマガジンハウス(旧平凡出版。1983年に改名)。
- (2) 『non・no』は1971年創刊の月2回刊(現在は月刊)で発行は集英社。
- (3) 『MORE』は1977年創刊の月刊誌で発行は集英社。
- (4) 『クロワッサン』は1977年創刊の月2回刊(創刊から1978年4月までは月刊)で発行はマガジンハウス。
- (5) 『クロワッサン』は、創刊当時は月刊誌だった。
- (6) 井上は「自立」を特に定義していない。
- (7) しかし、井上はこうした雑誌のすすめる女性の自立が読者の現実からかけ離れていることを指摘し、根拠の1つとして『クロワッサン症候群』(松原1988)をめぐる議論に言及している(井上1989:38)。その議論とは以下のようなものである。松原淳子によれば「女性の自立、自立、とはやしたて」(松原1988:8)、結婚よりも仕事をと主張していた女性雑誌『クロワッサン』は、独身の著名な女性文化人を多用してそのライフスタイルを紹介し、若い女性に

多大な影響を与えた。その結果女性の自立が流行現象となり、未婚のまま仕事にうちこみ余暇を優雅に楽しんだ女性達が、一定の年齢になって女性の自立を後悔し結婚を望むようになったという。当時 30 代半ばのこうした女性たちを松原は「クロワッサン症候群」の女性たちと命名し女性の自立を批判的に論じた(松原 1988: 7-14)。これに対して、わいふ編集部は『アンチ・クロワッサン症候群』(わいふ編集部 1989)で、日本人女性は現実的であり自立などという観念的な理由で行動するとは考えられないが、最終的にその行動が女性の自立と解放につながるのであれば、それでよいのではないかと反論した(わいふ編集部編 1989: 2)。

- (8) 連載「脱専業主婦」を含む。
- (9) 複数のキーワードが含まれているタイトルについては記事内容を確認して分類した。このため、生き方関連の記事でもタイトルにキーワードが含まれないものは分析対象から外れた。
- (10) これらの記事を除外したのは、『クロワッサン』が提示した〈女性の自立〉を明らかにするという目的にそって、直接生き方と関連する記事に絞ったからである。また、外国紙からの転載記事は、日本社会における「女性の自立」という視点の拡散を防ぐために外した。
- (11) タイトル一覧に「読者アンケート」、「ワイド版読者の手紙から」、「読者の手紙から○○○」といった注釈のあるものは、分析対象記事の分類 5. 読者投書の中の②読者アンケート結果報告、③読者の投書を元にした特集記事である。記事内に紹介されている投書が多いため複数の投書は他○件と記した。注釈のないものは①投書欄の投書で、複数の投書がある場合はタイトルの前に①、②などと記した。タイトルのない投書は、書き出しや内容を表している文章をタイトルの代わりに記載した。
- (12) 「インテリアコーディネーター」、「…プランナー」などの職業内容不明な和製英語の職業であり、カタカナ文字の職業を登場させることで「翔んでる女」イメージを与えているのではないかと指摘がある(女性雑誌研究会 1985: 110-111)。
- (13) 点数化の手順としては、記事の内容から判断して専業主婦に肯定か否定に 1 点を入れた。中でも、登場人物が複数のタイプの記事は、各人の意見について肯定か否定かに 1 点を入れて集計し、その上で記事として肯定か否定かを判断し 1 点を入れた。
- (14) 「どちらともいえない」には専業主婦に言及していないものも含まれる。
- (15) 「どちらともいえない」にはそれぞれの論点に言及していないものも含まれる。
- (16) エッセイスト、ノンフィクション作家。『淋しいアメリカ人』(1971 年、文芸春秋)で第 3 回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞している。
- (17) 1980 年の専業主婦世帯は全体の 64.2% であり(井上・江原編 2005: 84-85)、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考えを、1979 年には女性の 70.1%、男性の 75.6% が支持している(国立女性教育会館編 2006: 180-181)。
- (18) 『クロワッサン』には有名人だけではなく多くの無名の女性も登場する。だが『女性雑誌の日米墨比較研究』(女性雑誌研究会 1985)の「登場人物分析」(pp107-115。調査対象は 1984 年 1 月から 6 月までの『クロワッサン』の記事)によれば、同誌に登場する女性たちには独特のバイアスが読み取れるという。登場人物全体の 80% 強が働く女性であり、女性雇用者全体の 1% に満たない科学研究者、芸術家、編集者などの登場回数が多く、職業内容が不明確なカタカナ表記の職業の女性が多用されているといったバイアスであり、特にカタカナ表記の職種、すなわち「翔んでる職業」の与える虚構イメージと、登場女性と読者の実態とのギャップが指摘されている(女性雑誌研究会 1985: 107-113)。このギャップが読者に不満を感じさせていると考えられる。
- (19) 人々の感じる不満は当該人物のおかれた境遇の客観的な劣悪さに起因するのではなく、期待水準と達成水準との知覚された格差に起因するものと考えられ、この格差を相対的剥奪とい

- う（盛岡・塩原・本間 1993）。『クロワッサン』の読者は誌面に登場する女性たちを知る事で期待水準が上昇し、達成水準との格差が大きくなると考えられる。
- (20) 「翔んでる女」はエリカ・ジョング著『飛ぶのが怖い』（1976年、柳瀬尚紀訳、新潮社）を揶揄して生まれた言葉で、自由を求めて奔放に生きる女性を指す言葉として流行語になった（小阪 1980: 214-217）。
- (21) 「キャリア・ウーマン」とは高度な職業的達成を志向する女性。文字通りに解釈すれば「有職の女性」となるが、日本においては、より専門性の高い職種や管理職の女性を意味する。（福沢 2002: 94）
- (22) ロマンチック・ラブ・イデオロギーとは恋愛を基礎とする結婚こそ唯一の正当な男女関係であると見なす近代に特徴的な考え方。“性と恋愛と結婚”の三位一体規範をいう。（井上 2002）
- (23) 同誌による主婦と「翔んでる女」というステレオタイプによる二分化が、経済的に否応なく働かなくてはならない主婦をみえなくしている点には注意が必要である。だが、この時代は夫の経済力に依存する専業主婦が多かったことも事実であり、商業雑誌『クロワッサン』としてはこうした意味の働く主婦を読者として想定していなかったのだろう。

#### 【引用文献】

- 天野正子編著 2001『団塊世代・新論——〈関係の自立〉をひらく』有信堂高文社
- 福沢恵子 2002「キャリア・ウーマン」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真里・加納美紀代編『岩波 女性学事典』岩波書店、94-95
- 井上輝子・女性雑誌研究会 1989『女性雑誌を解説する—— COMPAREPOLITAN 日・米・メキシコ比較研究』垣内出版株式会社
- 井上輝子 2002「恋愛結婚イデオロギー」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真里・加納美紀代編『岩波 女性学事典』岩波書店、488-489
- 井上輝子 2008「マスメディアにおけるジェンダー表象の変遷」NHK 放送文化研究所編『現代社会とメディア・家族・世代』新曜社、204-226
- 井上輝子・江原由美子編 2005『女性のデータブック [第4版]』有斐閣
- 女性雑誌研究会 1985『女性雑誌の日米 墨比較研究』女性学研究会
- 国立女性教育会館編 2006『男女共同参画統計データブック—日本の女性と男性— 2006』ぎょうせい
- 小坂富美子 1980「女性の自立の社会的背景」川島みどり・木下安子・坂本玄子・小坂富美子『女性の自立——がんばり三人女の戦後史』勁草書房、209-247
- 松原惇子 1988『クロワッサン症候群』文藝春秋
- メディア・リサーチ・センター 1981『雑誌新聞総かたろぐ』
- 森岡清美・塩原勉・本間康平編 1993『新社会学辞典』有斐閣
- 落合恵美子 2004『21世紀家族へ（第3版）』有斐閣
- 坂本佳鶴恵 2000「消費社会の政治学—— 1970年代女性雑誌の分析をつうじて」宮島喬編『講座社会学7文化』東京大学出版、93-121
- 袖井孝子 1992「女性の自立を捉える枠組み」『女性の自立に関する研究』東京都生活文化局婦人青少年部婦人計画課、1-13
- わいふ編集部編 1989『アンチ・“クロワッサン症候群”：結婚しない女たちの素顔』社会思想社

(2013年10月3日 掲載決定)

# **A Content Analysis of "Independent Women" in a Japanese Women's Magazine Croissant and Its Readers' Voice**

**IKEMATSU Reiko**  
(Tokyo Women's University)

New types of women's magazines were launched during the 1970s and 1980s as Japanese and international women's rights and liberation movements emerged. One of the magazines, Croissant, positioned itself as a voice advocating the independence and liberation of women, and proposed new lifestyles for them. Yet, there has not been any concrete research on the meaning of "women's independence" as featured in the magazine. In this study, I analyze articles related to women's lifestyles that were published in Croissant during the 1970s and '80s and readers' letters, and explore how women's independence was presented in the magazine and how readers accepted this message.

The results clearly show that Croissant advocated two types of independence for women: First, they could live and work without being economically dependent on a husband. Second they could have active lifestyles while retaining their identity as housewives. Readers clearly agreed with the latter.

Women readers in those days accepted the prescribed gender role of a housewife and mother. They thought that women's independence was unrealistic and believed that they could not relinquish their nurturing role. Thus, they appear to have accepted women's independence as a goal, while maintaining their identity as housewives.

**Keywords:** Housewife, Women's Lifestyles, Women's Independence, Magazine Analysis